



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	適地適木
Author(s)	-
Citation	琉大農家便り(109): 6-10
Issue Date	1964-12
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20940
Rights	

適地適木

1) 適地適木はなぜ必要か

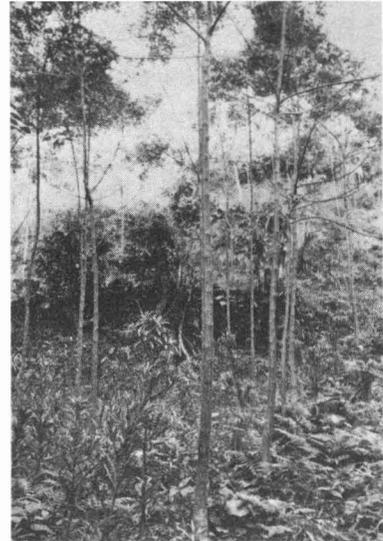
山に木を植えようとする場合、まず考えなければならぬことは、なるべく手数や金をかけず、できるだけ早く大きくなるようにすることです。つまりなるべく安い経費で、なるべく沢山の収穫をとるということです。

たとえば畑作の場合を考えてみますと、大根やごぼうなどを作ろうと思えば、まず土を深く耕やし、肥料が必要であれば、これを沢山やります。麦を作るのに酸性が強ければ、石灰をまいて中和してやることができます。また排水の悪い畑では、大規模な排水工事をするのも出来ますし、その都度高い畦を作って補うことも出来ます。乾きやすい畑では用水を引いて、灌水することも普通に行なわれる方法です。

このように畑作の場合には、耕耘、施肥、土地改良工事等によって、作物の欲する条件を人工的に作ってやることができます。

ところが木は植えてから利用されるまで、かなりの年月が必要でありますし、植えた木が要求する通りの状態を、人工的に作ってやることは大変むずかしいので、どうしても自然のまゝの力に大きく左右されることになります。林木が欲する通りの条件を安価に作ってやることは、現在の技術段階では、まず不可能に近い状態です。こゝに適地適木ということが、林業では非常に大切なこととなります。

技術の進歩が非常に早い今日、自然まかせの造林は、いかにも時代遅れの感がありますが、大きな自然の力を軽視したり、これを簡単に人間の力で変えることができるなどと考えることは大変危険な考え方だと思います。自然の力と樹木の性質とを、近代科学の力で解明して正しく理解し、自然の力を巧みに利用して、健全な森林を仕立て、成長量の増加を図るということが、林業経営、森林育成上の根本的な考え方であればなりませんし、



(1) 疏大与那演習林のセンダンとイヌマキの混交林 (2年生)

これが適地適木ということのもとになる考え方でもあります。

2) 土地と樹木との一般的関係

自然には割合に条件の悪い所で育っている木であっても、いざこれを植えようとするとき、瘠せ地や乾燥地ではなかなか注文通りにうまくのびてくれないこともあります。造林地の成績をみても解るように、スギやヒノキはどちらかといえば、やゝぜいたくな木で、土壌条件に好き嫌いが強いのですが、天然林ではあまり条件のよくない屋根筋ないし、中腹以上にもよく育っています。特にヒノキは一般にかなり瘠悪な土地にだけ生えていますが、こんな所にいざ植えようとしみますと、植えてもなかなか育ちません。

一般的にいえば、針葉樹は広葉樹にくらべて、土地条件は少々悪くても育ち得るし、広葉樹は一般に水分や養分などに恵まれると、非常によく繁茂して、針葉樹を圧倒しますが、条件が少し悪くなると、針葉樹に及ばないということになります。天然には瘠悪地だけに生えてい

るような木でも、土壤条件がよければ、それだけ成長も早いということになります。

同じ針葉樹どうし、あるいは広葉樹どうしの間でも、土地のよしあしに敏感な木と、鈍感な木の間には、同じような関係があります。たとえばアカマツは一般に相当な瘠地にもよく育っているのを見かけます。しかし、これは決して瘠地が好きだということではありません。ほかの木よりも瘠地、乾燥地に対する耐久力が強いので、ほかの木を圧倒してマツ林になるのであり、湿潤肥沃な土地では、ほかの木がよりよく成育するから、圧倒されて育たなくなり、決して瘠地が好きだということではありません。だからマツを植える時には、やはり湿潤な肥沃地からまず植えるべきで、この場合幼令時に少し丁寧に手入れをしてやって、ほかの木におさえられないようにしてやれば、大変立派に育ちます。ただ、条件が整った所では、マツよりもヒノキ、ヒノキよりもスギの方がよい成長をするので、スギを植えた方がより有利だということになりましょう。このことをよく考えなければなりません。

一般にスギは水分と養分に敏感であり、マツはこの点には比較的鈍感ですが、深根性であるため、土の深いことが第1の要件であるように思います。

3) 土地のよし悪しの見分け方

(1) 地形を調べること

多くの場合木を植える場所は、耕作のできないような急傾斜地や石礫地になります。そのため山林を仕立てようとする土地は、かなり地形が凸凹していて複雑です。10アールか30アールの小さな山でも、その中にはマンジュウのようにふくらんだ部分もあれば、すり針型に凹んだ場所もあります。また比較的単純な形をしていても、一つの斜面の上部と下部という違いがあります。また斜面が北向きか南向きかで、日当たりが違ふし、風当りもちがいます。

このようなわずかな地形のちがいによって、土の表面



演習林78林班のタイワンハンノキ(6年生)

や土の中を動く水分の状態はすっかり違ってきます。土の中では水分と一緒に、水に溶けやすい養分が流れ去ったり、集まってきたりしますし、土砂の粒も、あるいは削りとられたり、あるいは崩れてきてたまったりします。したがって山を見る場合には、まず地形をよくみて、水の集まりやすい場所か、逃げやすい所かを見極めることが大切です。これは水分がどうであるかを知るだけでなく、土が肥えているか瘠せているかを知るのに役立ちます。

(2) 土壌を調べること

地形をよくみた上で、次は主な所で出来るだけ沢山の穴を掘って、直接土をみる必要があります。道路や溝などの切り取り面でも、土の状態をよく知ることができます。黒い土層が浅いか深いか、下層がどんな色をしているか根はどんなふうになっているか、粘っこいか、ザラザラしているか、堅くてちみつか、軟かく水や空気の通りがよいか、こういう特徴をしらべることによって、地形から一歩進んだ直接地下部のようすを、細かく知ることができます。

(3) 林木や下草の種類を調べること

現在生えている林木や下草の種類、あるいは伸び具合

10ページの左欄に続く

7 ページの続き

をしらべても、間接にその土地がどんな状態であるかを判断することができます。

4) 土地の状態を知って適した木を植えること



(2)を近くから写したもの

このようにして、木を植えようとする山の自然的条件をよく調べ、その上で何をどう植えるかを決めなければなりません。土壌や岩石の名前を1つ1つ知らなくてもまた土壌の成分や状態を分析までして調べなくても、細かく丁寧に観察することによって、かなり正しく山や土壌の状態を知ることができます。それだけで結構役に立ちます。

土地の状態をよく調べて、大きくなる見込みのある木を選ぶこと。ある木を植えようとする場合には、その木が充分育ち得る場所を選んで造林します。これが適地適木です。

林地でも最近はかなり広く深く耕耘したり、肥料をやる技術などが進歩してきました。しかしその結果には限度があって、もともとスギが充分育ち得ないような山にスギを育てることは、不可能ではないにしても経済的にはなりません。一応育ち得る所で、その成長をよりよくすることを狙う程度でありましょう。

実際問題としては、まず確実な見通しのある樹種を、確実に成林し得る所から造林していくこと、これが一番大切だと思います。

ニッポン放送“林業講座”

きょうの林業あすの林業より抜萃